

歴史・文化・自然を活かした まちづくりと観光

名古屋市立天文学大学院人間文化研究科

(あまた・あきし)

山岡 明

名古屋市立天文学大学院人文社会学部 学生

(あさい・ゆきこ)

浅井 ゆきこ

研究所の共同研究プロジェクト・特別研究奨励費企画として、「歴史・文化・自然を活かしたまちづくりと観光」と題した講演会が二月一日に人文社会学部棟二〇一教室で行われた。

講師は東京大学大学院工学系研究科(都市工学)教授の西村幸夫氏である。西村教授は『都市保全計画』という一〇〇頁を超える大著を出版されるなど、都市計画の第一人者として国内外で活躍している。今回の講演会のタイトルも、この大著の副題を使わせてもらった。年末の寒い日にもかかわらず、延べ一〇〇名近い人が参加して盛況な講演会となった。今年度から始まった総合科目「観光」の受講者だけでなく、芸術工学部や卒業生、公開講座の聴講生、名古屋市などからも参加があった。

講演はパワーポイントと写真により、じつにビジュアルで分かりやす

いものであった。ビジュアルな講演を紙上に「再現」するのは容易ではないが、なるべく講演の流れに沿って要点を記していくことにしよう。

◇「観光まちづくり」

資料として配布されたのは、教授の「まちの個性を活かした観光まちづくり」(『新たな観光まちづくりの挑戦』、ぎょうせい、二〇〇二年所収)という論文である。資料の説明はなかつたが、「観光まちづくり」の成り立ちや取組みを知るうえで参考になる。講演も「観光まちづくり」の成り立ちから始まった。

建設省と運輸省が合体して国土交通省になった。従来、まちづくりは建設省、観光は運輸省の所轄で、分断されていた。国土交通省になったことで「観光まちづくり」という言葉ができ、観光とまちづくりを相互に関連づけて進めていくことになっ

た。「観光まちづくり」には、まちづくりが観光にまで至ったという面と観光がまちづくりにまで拡がってきているという二つの側面がある。

◇観光から「観光まちづくり」へ

これまで、観光業者は隣の旅館より儲けたいなど、自社の利益のみを追求していた。しかし今は、温泉街でも自分のまちと、他のまちの厳しい競争になっている。まちに住む人と一緒に協働で、まちの魅力を高める必要がある。

主な観光地のなかで函館、松江、川越、高山、小国(熊本県)、遠野、古川(飛騨市)などは観光客が増えている(JTB資料より)。これらは目玉となる観光スポットはないが、まち全体を見て楽しむことができるという共通点がある。箇条書き的にまとめると次のようになる。
・伸びているまちに共通しているのは、

まち全体が魅力的

・観光資源そのものだけでは足りない

・訪れたいまちに住みたいまち(そのまちの生活文化に惹かれる)

・ロケーションをテーマにする(見て楽しむ)

・個人の努力からみんなの協働へ

・ルールづくり(まち全体で一つの方向に進むために、ルールが必要)

◇まちづくりから「観光まちづくり」へ

これまで、観光とは無関係な地域が多かった。観光地でもよそ者は来て欲しくない、見世物じゃない、まちを汚して欲しくないなどと考える人が多かった。だが観光をとりまく環境も変化してきた。

・人口減少社会が到来して、「定住人口」だけでなく「交流人口」も重要に

(従来、観光地に行ったら殿様のように丁寧に扱ってもらい、癒されようとしていた。しかし、今後は

対等な「交流」が重要となる。一緒にまちを盛り上げていく応援団

になる仲間をいかに増やすかが大切)

・都会だけでなく田舎もおもしろい(農業や田舎に魅力を感じる人が増えている)

・地域の新しい文化創造へ

(文化は大都市だけにあるのではな

い。自然の移り変わりを取り入れた田舎の文化もある。都会と田舎の情報格差や移動時間がどんどん小さくなってきている中で、地域の個性を認識しているかが生き残りの決め手)

- ・五感で楽しめるまち
- ・住みやすい町は、人がうらやむ町



西村幸夫氏

◇事例紹介(過去と現在を対比させるなど、数多くの写真による説明)

①城崎温泉：温泉の湯量が少ないため、外湯が多い。この弱点を逆手にとつて、外湯をめぐる「入浴手形」を発行し、外湯までの景観を整備した。いまの「入浴手形」の原型がここにある。

②湯布院：盆地から見える由布岳の景色を活かす。別府と差別化をはかり、大きなホテルはつくらない。建築ガイドブックをつくり、街道など村の風景の景観保全に取り組み。「牛食い絶叫大会」を開催し、畜産業を盛り上げる。昔からの農業を基本とした生活を守り、観光客にも地鶏や産地の野菜をふるまう。

③金沢：行政が主体となり、積極的に街並み保存や景観保全に取り組み。大規模なゾーニング、高さ規制、空き用地の買い取り、改築の補助金、水路の整備、広告規制など先進的な取り組みが多い。何もやらないのは中立ではない。

④田主丸(久留米市)：憩いの場や飲食店・雑貨屋が並ぶ街道を、地域の住民が盛り上げてきた。今は福岡から若者がたくさん来ている。もともと柑橘類で有名な農業地域。住んでいる人自身が、住みやすく楽しくなるように創意工夫をしていることで、外から来た人に魅力を感じさせる。まさに住みやすい町は人がうらやむ町である。

⑤高山：主要道路の「四つ角整備」。高山に合ったデザインに変えていく。少しずつの変化でも、数

十年かけて景観が変わることでまちの雰囲気も良くなる。今では年間三〇〇万人が訪れるようになった。

⑥越後村上：一人の鮭屋の主人がまちの活性化のため「お人形めぐり」を始めた。一軒ずつ人形を置いてもらうことを頼み、地図を作った。豪雪地帯の重厚な家屋の内部が見られるため、参加者の反応が良かった。今では秋に「屏風まつり」、四月には臨時にSLが走っている。「町家再生ファンド」という取り組みも始まっている。

⑦石見銀山：来年、世界遺産に登録される予定の銀山。銀を運んだ街道、港、大森という町すべてが世界遺産になるうとしていく。住民が延べ一〇〇回の議論を重ね、世界遺産認定後の対応を協議し、石見銀山行動計画を策定。「守る、伝える、究める、活かす、招く」の五つを柱に、観光客が増えてもまちの良さを守る。

◇近説遠來

「近き者説びて遠き者來る」(論語より)。地域の住民が喜ぶことで、遠くから人が観光に来て、交流することができ。観光まちづくりの真髄は

そこにある。

◇コメンテーターから

服部幸造教授：行政と住民との協働が重要だが、地域社会の現実は厳しい。

吉田一彦教授：観光資源を点から線、面へ広げていくこと、川と水辺が重要だ。

◇コメンテーターと参加者からの質問・感想に対する西村教授の回答

・名古屋は城下町であり、その遺産の発掘と計画都市の「計画」に光をあてるのが重要だ。

・規制に対する住民との合意形成について。アンケートなどを細かくとり、かつ情報公開を徹底することで、住民が魅力を感じているスポットを認識し、大切にしようという気持ちも芽生える。

・駅前の近代的なビルについて。新しい建物も、住んでいる人の多様なニーズに応えるために必要であり、都市型観光の特徴を活かす。

・水辺空間について。見直されつつあるが、堀川をはじめ都市内河川の整備が重要だ。

・大した魅力がないまちへの対策について。個性のない人がいないように、個性がないまちはない。見えやすい、見えにくいはあるけれども、



講演会当日の様子

何かしら個性があるはず。歴史をたどれば、そのまちのストーリーが浮き上がる。

- ・都市計画道路について。車が通りやすくするためと、防災の観点から、拡幅の一端をたどってきた。しかし車が通らず安全で、静かな狭い道も重要だ。
- ・住民参加について。徳島県の「新町川を守る会」では、河川の清掃と無料の遊覧船の運航を行っている。なぜそんなことができるかと聞いたとき「川は、自分の家の庭だから掃除するのは当たり前だ。ボランティアではない。行政が支援してくれるのも、自分の庭にお金をかけてくれて有難い」と言われた。

まちづくりは、自分の家の延長だと思える人が、何人いるかが問題なのではないか。そういう意味の「公」意識があることが大切だ。

- ・高さ規制に関して。全国的に規制が始まっている。新宿などの大都会でも実施されている。
- ・看板について。日本は規制がゆるい。ただサラ金の看板は、たばこ同様、貸金業法の改正によって規制強化が進む可能性がある。

◇まとめにかえて

山田はこの講演会を企画し、コーディネーター役をつとめたが、本当に勉強になった三時間であった。「観光まちづくり」の各地の取組みから多くの示唆を得ることができた。名古屋の「観光まちづくり」について、今後さらに調査研究を進めていく意欲をかき立てられた。



名古屋市東区・文化のみち 二葉館 (山田明撮影)



名古屋市東区・文化のみちに残された門 (山田明撮影)

